

FM3-90『Tactics（戦術）』の改定とそれを学ぶ意義

岩上 隆安

はじめに

アメリカ合衆国陸軍（以下、「米陸軍」という。）は令和 5（2023）年 5 月、FM3-90『Tactics（戦術）』を改定した。本改定は平成 25（2013）年 3 月以来であり、約 10 年ぶりとなる。陸上自衛隊では永らく「戦術は幹部自衛官のお家芸」と言われている。つまり、陸上自衛隊では戦術を幹部自衛官の素養の 1 つとして重要視している。しかも、我々は近年同盟国である米国、特に米陸軍と日米共同訓練をはじめ密接に連携している。

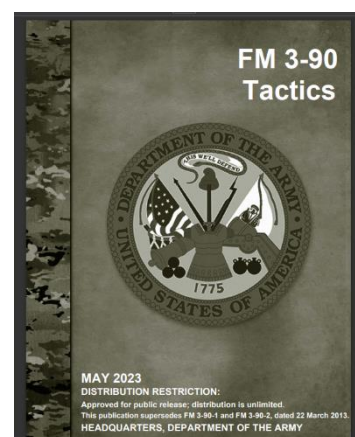
FM は規範性のあるドクトリンの一部なので、少なくとも今後の彼らの行動を変容させることになる。彼らの行動が変われば、共同して事に当たる我々の行動が全く変わらないとは考えにくい。つまり、本改定は陸上自衛隊に無関係として切り捨てられない。

ここでは、FM3-90 の概要とその注目点を簡潔に述べたうえで、それを学ぶ意義を考察する。拙文を見て興味を持った諸氏は、それを深めるため、また正確な理解のために是非インターネットで検索するなどして、原文に当たってもらいたい。これはもとより個人の見解であり、防衛省、陸上自衛隊、富士学校の見解ではない。

1 FM3-90 とは

これは米陸軍が制定しているドクトリンの一部であり、攻勢作戦、防勢作戦及び可能化作戦における戦術や技術について記述されている。これは 4 部 20 章からなる本文と 3 つの付録で構成されている。頁数は約 480 頁になる大作である。

本文の第 1 部は戦術に係る全般事項(Tactics Overview)、第 2 部は攻勢作戦 (Offensive Operations)、第 3 部は防勢作戦(Defensive Operations)、4 部は可能化作戦 (Enabling Operations) が記述されており、付録は A が戦術統制手段(Tactical Control Measures)、B が戦術任務用タスク(Tactical Mission Task)、C では包囲(Encirclements)に係るものである。



2 主要注目点

今回の主要変更点は原文の導入部に詳細に記述されているので、細部はそちらを参照されると正確である。ここでは記述内容が類似している陸上自衛隊の『野外令』及び『野外幕僚勤務』との差異を意識して注目点を述べる。

(1) 戦いの原則の項目がない

戦いの原則 (principles of war) を知らない幹部自衛官は恐らくいないだろう。しかし、ここにはそれがない。しかも、何故ないのかの記述もない。よって、ここでは理由を推測するしかないが、少なくとも米陸軍ではこれを戦術として記述するには適さないと判断しているのではないか。ちなみに、これは廃止された訳ではなく、FM3-0『Operations (作戦)』の付録 A に統合作戦の原則とともに記述はある。

(2) METT-TC から METT-TC (I) へ

ここでは陸上自衛隊で状況の特質と称される、任務、敵、地域、我、相対戦闘力や民事の視点にさらに情報 (information) が追加されている。それは情報の概念が近年普及しており、作戦間、指揮官は常にその影響を考慮する必要があるというのが理由である。ここで情報が括弧の中に入っているのは、それ単独で考察するのではなく他の要素を考察するときに通して考察する必要があることを示している。

ちなみに状況の特質を、米陸軍は任務変数 (mission variables) と呼んでいる。

(3) 戦術的枠組み (4F) の導入

陸上自衛隊には類似する考えに時系列的思考がある。それは状況の特質の把握、構想決定、計画作成、命令下達及び実行の監督などである。他方今回米陸軍は、発見 (find)、拘束 (fix)、対処 (finish)、ダメ押し等 (follow through) を戦術的枠組み (tactical framework) として提起し、それを攻勢作戦、防勢作戦のいずれでも使用すると規定した。

(4) 撃破の語を戦術任務用タスクから削除

陸上自衛隊で「敵の撃破 (defeat)」は戦術作業時の常套句であるが、米陸軍はそれを戦術任務用タスクから削除した。付録 B によると、戦術任務用タスクとは任務を分析して 5W1H に書き下すミッション・ステイトメントの“何 (what)” に当たる部分である。撃破という語は多義であるので、米陸軍はそれを存続させることによって発令者が達成を企図する状態が曖昧になることを懸念したのかもしれない。現に、破壊 (destroy)、奪取 (seize)、確保

(secure) や占領 (occupy) といった達成する状態が明確なタスクは残っている。

(5) 条件作為作戦が可能化作戦へ

従前条件作為作戦 (shaping operations) とされていた名称が可能化作戦 (enabling operations) 変更になっている。その定義によれば、それは攻勢作戦、防勢作戦及び安定化作戦 (stability operations) を接続させるもので、それ自体は決定的ではないが、全ての作戦成功のための状態を創り出す資となるものである。ここでは偵察、部隊移動、部隊交代、欺騙など 9 種が記述されている。

(6) 140 を超える定義の見直し

ここでは記述内容の理解を容易にするため 140 以上の用語の検証がされている。具体的にはここでは掩護部隊 (covering force)、包囲作戦 (encirclement operation)、火力打撃 (fire strike)、翼側攻撃 (flank attack) といった 11 語が削除され、可能化作戦 (enabling operation)、交戦中断基準

(disengagement criteria)、即応対処部隊 (quick reaction force) など 20 語が新規追加されたほか、100 を超える語の定義が変更されている。ちなみに包囲作戦が削除された理由は付録 C で、包囲自体が目標ではなく、それは我の攻勢作戦や敵の行動による結果であるからと説明されている。

(7) 総括

本改定の注目点を簡潔に述べれば、原則事項を戦術として記述せず、思考内容を変更したうえで新たな枠組みを提起し、さらに 140 以上の語句の定義を見直したということになる。本改定は、大幅修正と言って良いだろう。

3 FM3-90 を学ぶ意義

クラウゼヴィッツは約 200 年前、「戦争目的を達成するのに戦いを用いる方法」である戦略と対比して、戦術を「戦いにおいて戦闘力を使用する方法」(クラウゼヴィッツ、113 頁。) と規定した。彼はまた戦争の本質 (nature of war) として強制性、確からしさや偶然性からなる賭け、政治への従属性 (三位一体) を挙げ、その達成手段は戦闘である旨述べている (同、74 頁。)。そう考えると、彼は戦術を軍隊運用の本質的方法論と位置づけていたと言える。

現代の戦争 (character of war) は、戦場が物理空間だけでなく、仮想空間、人間の認知までに拡大し、そこでは軍隊のみならず、民間軍事会社

(PMC: private military company) や義勇兵といった非軍事主体も運用され

るうえに、サイバー、電磁波や情報戦などといったノンキネティック手段が活用されている。そこではさらに政治、外交はともかく、経済制裁といった従前は非軍事と見なされていた国家の諸機能が影響力を行使している。しかも戦争は戦闘成果の累積だけでは勝利できないとの認識で、近年では200年前には自覚されていなかった作戦術といった概念の研究もされている。つまり、現代の戦争は複雑さを増している。そうした中で、軍事では新領域、新概念の戦いや「戦わずして勝つ(win without fighting)」方法も研究されている(岩上、118-121頁)。つまり、現代の戦争への対応に正鵠を射るには高度な知的能力を必要としている。

実際、ウクライナ戦争では西側諸国の外交、開示による抑止(deterrence by disclosure)などの様々な努力にも拘わらず、ロシアによる開戦を防ぐことが出来なかった。また非軍事的諸力、非軍事手段やノンキネティック手段は現状で戦局好転の決定打にはなっていない。それらは現状の消耗戦の一因とも考えられる。しかも、ウクライナが最近各国に軍事支援の拡充を働きかけていることは、非軍事やノンキネティック手段による打開模索だけでは不十分ということを裏付けているようにも思われる。

そう考えれば、我々が新領域や新概念などの戦争の特性研究に併せて、戦術といったその本質を問い直すことの必要性を認識できるのではないだろうか。非軍事やノンキネティック手段が戦場で決定打になっていない中で、軍隊運用の本質的方法論の重要性は、むしろ高まっているようにも思われる。少なくとも、クラウゼヴィッツの主張の中には部隊規模の記述はなく、米陸軍も師団以上、軍団を含んで戦術を考察している事実を思えば、戦術を単に小部隊運用や低レベルの方法論と見なすことには無理があるのだろう。

そのうえで、FM3-90を学ぶには2つの意義があると言える。それはまず同盟国であり、世界最強とも言われる米国陸軍が、軍隊運用の本質的方法論を如何に捉えているかを認識できることである。それは換言すれば、世界の第一線での紛争解決に関与してきた組織の現状認識と最新の方法論を知ることができるということである。そうした知識は練成訓練だけでなく、日々の業務改善のヒントにもなるだろう。

次いで、それは今後の陸上自衛隊の戦術を考察する上での示唆を得られることである。言うまでもなく、陸上自衛隊の主任務は自衛隊法第3条第1項に規定される国防である。そして、それは同盟国である米国との共同が前提である。今回、米陸軍が軍隊運用の本質的方法論を改定したことは、彼らの行動を変容させるので、いずれ日本の国防にも影響するだろう。よって、その情報を早期に入手して、陸上自衛隊の戦術に向き合い、その差異を認識したうえで、より良い国防を達成するために如何にするかを今から考察するこ

とは、我々が今後より良い施策をより早く案出するために有益だろう。

おわりに

本改定の米陸軍内の反映状況は、今後の日米共同訓練などで確認ができるだろう。本改定を知って、共同訓練の場でその状況を確認することができれば、彼らが如何に早く適応できるのかを知ることができる。それはカウンターパートの理解を深めることにつながる。また、読者諸氏の中には、原文読解では飽き足らず、疑問をその現場で確認する向きもあろう。それは現場レベルでの相互運用性（インターオペラビリティ）の向上になる。

重ねて、現状で日米共同は国防の前提である。カウンターパートの理解を深め、その過程で生じた疑問を確認しながら、現場レベルでの相互運用性向上を図ることは、それが国防達成の一部であるという意味で、さらにその実効性向上にもなるということである。つまり、FM3-90を学ぶことは、それらの行為自体が国防達成の一部であるという意味で、その実効性向上になるとも言える。本稿が米陸軍のより深い理解とより良い日米共同、そしてより実効性ある国防への一石になるのであれば幸いである。

【参考文献】

岩上隆安「陸上自衛隊への新概念の専門部隊導入について — 「次なる戦争」の視点からの考察—」『戦略研究』31、令和4年10月。

カール・フォン・クラウゼヴィッツ『縮訳版 戦争論』加藤秀治郎訳、日本経済新聞出版、2020年。

Headquarters, Department of the Army, *FM3-90 Tactics*, May 2023.

URLは、

https://armypubs.army.mil/ProductMaps/PubForm/Details.aspx?PUB_ID=1026901.